

『経済のリアリティと医療：近年のパンデミックと死と生にまつわる「具体性の置き換え」問題を巡って』 On Economic Reality and Medicine: The Recent Pandemic and the 'Misplacement of Concreteness' issue around Death and Life

企画提案者：浦井 憲（大阪大学）、村上裕美（追手門学院大学）

司会および基本提題：浦井 憲（大阪大学大学院経済学研究科教授）

・パネリスト：小林大介（神戸大学大学院医学研究科特命准教授）、森井大一（日本医師会総合政策研究機構主任研究員）、村上裕美（追手門学院大学経済学部専任講師）、その他指定討論者を1～3名。

・構成：基本提題10分、パネリストによる報告20分～30分×3 or 4、その他の指定討論者の討論を含めて、全体120分。

・日時の希望：指定討論者の都合により、10月1日（土）の午後または2日（日）の午前または午後を希望。（場合によってはオンラインでの登壇可能性あり）

（企画の概要）近年のCovid19-パンデミックを受け、我々は大きな世界の変容を目の当たりにしている。それは、まず言うまでもなく今日の社会・日常生活という現実の水準においてであり、そして今日の科学あるいは学問知識といったことを含めての水準でもあり、更には学問の方法・政治・宗教・倫理といった、全てを含めた水準と層においての話でもある。「非常事態」や「医療崩壊」といった言葉の飛び交う中、我々が問われたものは、単なる感染症への対策（のみ）ではなく、そのための「知識」、「情報」の確かさ、正確さ（まで加えたもの）ですらなく、そのような知識と情報の媒体（マスメディア）のあり方、専門家というもののあり方、産業というものの力、学問とは何であるのか、そして（取り分け我が国における）個人個人のモラルや良識とは何であるのか、といったことを含めた、およそすべての水準と層に渡るものであった。そしてそのような問いは、今なお繰り返され続けており、この変容がいかなる終着点に我々とその「世界」を導いているのか、未だ定かではない。

「命か経済か」という問いが何度となく繰り返されたことに代表されるように、「経済」のリアリティというものは、しばしば医療における目的ともいうべき「命」に対して、時として対蹠的に取り扱われるものである。もとより、健全な経済活動なくして健全な社会もまた成立するはずはなく、こうした対立は見かけ上のものに過ぎない。ただし、これは「経済」という言葉と、そのリアリティに向けて、単純すぎる理解（具体性を置き間違えていること）というよりも、そこにたとえ何を置いたとしても、おそらくすべてを圧倒してしまい兼ねない「命」ということのリアリティ、即ち「死」の（故に「生」の）リアリティということにおいて、「具体性を置き間違える誤謬」の問題に帰すべきことのように思われる。

我々はとりわけ「医療」という問題に関連して、「命」という言葉を前にするとき、ありとあらゆる思考を中断させてしまうようなところがある。それ故、そこには「宗教」ということが（「聖性」とは価値否定の価値であると西田が述べたように）厳然と関わって来るのであり、医学にせよ経済学にせよ、実はその「学問」としての「根底」に向けられた『最も』重要な問いかけが、我々の「生きる」ということ、そのものにまつわることがらとして、常に新たに、投げかけられているに違いないのである。生と死のリアリティということにおいて、我々が具体性を置き間違えるとはどういうことか。そしてそのリアリティを（部分的にも）取り戻すための、私達の「知」のスタンスとはどのようなものか。

当該シンポジウムは、この数年に渡る大阪大学方法論研究会、数理経済学会方法論分科会、そしてホワイトヘッド・プロセス学会のメンバーによる共同研究である「RFSS 社会科学のためのリアリズム」の一環として、企画されたものである。経済と経済学、経済政策、医療および公衆衛生、そして医学ということを経合しながら、今日重要かつ喫緊でもある上記テーマについて、ホワイトヘッド「具体性を置き間違える誤謬」をキーワードとしながら、パンデミック（小林）、生と死（森井）のリアリティにまつわる「医療」と「国家財政」の問題に向けて、経済学のリアリティとしての「市場」と「貨幣」についての一般均衡理論という立場（村上）を交え、今日の我々の進むべき方向を浮かび上がらせるような、議論の場を構築しようとするものである。